みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「裸の王様」の行方
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第23回)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2014-03-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 南, 真木人
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5106

田植えの合間にひと休み。国民が底抜けの笑顔に戻れる日は近いのだろうか（1992年）。

変わるネパールと変わらぬネパール

――グローバル化した世界に暮らす――

第23回

日本ではあまり報道されないが、ネパールの首都では9月以降、政党や人権活動家による民主化を求めるデモが繰り返されている。ネパールは今、歴史的な転換点にさしかかっている気がしてならない。それは政体が、立憲君主制から共和制に変わるかもしれないという事態である。これがいかに革命的で微妙な問題かは、共和制とは現に君臨する国王を無き者にすることであり、日本でいえば天皇制を廃止するのに等しいことだと想起してもらえば、ご理解いただけるだろう。

現代ネパールの最初の転換点は1990年の民主化であった。多くの犠牲を払って絶対王制が廃止され、立憲君主制の多党制民主主義が実現した。だが、そうしてできた新憲法には、国王に非常事態大権と国軍の最高指揮権を認める条項が残され、民主化が不完全なことを露呈した。ネパール国王は民主化後も単なる「象徴国王」ではなかったのだ。平時はそれがことさら問題になることはなかった。だが、1996年、共和制を求める共産党毛沢東主義派（マオイスト）が武装闘争をはじめて内乱状態に陥り、2001年に王宮内で前国王が射殺されてからは事態が一変した。王位を継承した前国王の弟ギャネンドラ国王は、徐々に政治に介入しはじめ、今年2月1日、ついに国軍を用いて全権を掌握、直接統治に乗り出したのである。

「裸の王様」の行方

事ここに至り、これまで立憲君主制を支持してきた政党に変化が現われた。9月にはネパール共産党マルキスト・レーニニスト（UML）が、はじめて民主的共和制を党是として謳った。一方の有力政党、ネパール会議派も党則から立憲君主制の文言をなくし、共和制へと一歩踏み込む立場を表明した。もとより共和制の実現は、マオイストが導く武装闘争の主要な目的であった。マオイストはこれを機に、即刻3か月の一方的停戦を宣言し、政党側に歩み寄る姿勢をちらつかせている。

今のところ、政党が行なう集会とデモに一般市民が大挙して加わる状況にはないようだ。国民は汚職の疑惑が絶えない政治家（政党）に対しても信頼をなくしているからだ。だが、反国王ないし共和制の旗の下、もし政党とマオイストが共闘し、マオイストが武装解除して元の一政党に復帰するようなことになれば、世論が共和制に向けて大きく動き出すかもしれない。「裸の王様」により後戻りさせられた時計の針は、正されるのか。それとも国王がより強硬な手段で巻き返しを図るのか。ネパールは今、正念場をむかえている。

写真・文◎国立民族学博物館助教授 南 真木人

1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『〈都市的なるもの〉の現在』（東大出版会 2004年）、『嗜好品の文化人類学』（講談社 2004年）、『エスノ・サイエンス』（京大出版会 2002年）など。